

## 立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

## 大学院学生研究

## 2015年度研究成果報告書

<b>研究科名</b>	立教大学大学院 異文化コミュニケーション 研究科 異文化コミュニケーション 専攻		
<b>研究代表者</b> (2016年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻・6年	村松 麻里 印	
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・教授	平賀 正子 印	
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
<b>研究課題</b>	子ども集団における物語の受容過程のコミュニケーション分析：絵本読み聞かせを中心に		
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2016年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻・6年	村松 麻里	
<b>研究期間</b>	2015 年度		
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 190,116円 / (採択金額) 200,000円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

絵と文章との間に意図的なずれや空白が設けられ、絵と文字の双方を読み取ることによって多様な解釈が読者側に許容される「現代絵本」は、日本国内の教育現場で紹介されることが非常に稀である。本研究では国内の3つの小学校の3年生児童200名以上を対象に「現代絵本」作品の読み聞かせを行い、児童たちの発話や反応を映像・音声で記録するとともに、絵と文字による記述式のシートを用いて児童の物語解釈を調査した。本研究は、これらのデータを談話分析の手法や相互行為の社会言語学におけるフレーム、フッティングといった概念を用いて分析することにより、児童の集団読みにおいて生起するコミュニケーションと物語受容の過程を明らかにするものである。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 絵本の集団読み ] [ 受容研究 ] [ 読書反応 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

## 1. 研究の概要

本研究の目的は、児童らのつぶやきや談話の分析を通して、物語（現代絵本）の集団読みにおける児童のコミュニケーションの諸相を明らかにし、集団読みにおける物語の受容過程についての解明を試みることである。

児童の集団読みに関する国内の先行研究としては、読書推進の立場から物語の情操教育的な有効性を訴えたものや、学校の国語授業において物語文を扱った際の教室談話などがデータとして用いられたものなどが多く、児童らの談話を分析したものとしては、例えば「児童らのより正確な読みや深い読みを引き出すためには教師のどのような声掛けが有効であるか」などの点が議論されてきた。しかし、こうした研究の多くは成績評価が行われることを前提として、「正解のある読み」をいかに効率的に指導するかといった教科教育的な視点からのものであり、学校教育の現場では、そもそも、本研究において取り扱ったような現代絵本、すなわち、特定の「正解」を持たない種類の物語作品が存在すること自体が周知されているとは言いがたい状況にある。

本研究では、欧米において発展してきた絵本論の知見をもとにそこで「現代絵本」と定義される作品を選定して、小学 3 年生児童を対象にクラス全体での読み聞かせを行い、その後さらに少人数グループに分かれての児童だけの自由な読みの時間を設け、児童らの談話を記録して分析した。そして、絵とことばとが独自の語りを展開することによって物語解釈が多様に存在しうる現代絵本作品を、児童が 1 人きりではなく複数でコミュニケーションを行いながら読む場合、作品にしくまれた「空所」を児童らがどのように埋め、どのように物語を解釈し、意味の生成を行っていくのかに焦点をあてたものである。

## 2. 絵本に仕組まれた「空所」について

まず、作品にしかけられた「空所」についてであるが、ウルフガング・イーザー (1982) は「テキストと読者の相互作用が意味を生成する。契機となるのは、空所（ギャップ）である」と述べている。また、現代絵本研究の第一人者である Nikolajeva (2006) は「空所」を 3 種類に分類したうえで、その 1 つが「読者が自らの想像力を駆使して、テキストに積極的に関与することを促すために、あえて作者がテキストに残したギャップである」ところの「創造的な空所」(creative gap) であるとした。

本研究では、意図的に設けられたこの「空所」が物語解釈のカギを握るような作品を題材として用い、児童らの意味生成の過程を追った。作品は、Rebecca Cobb による、調査実施当時刊行間もない絵本、*The Something* (2014) を選定（『なんだろう』と題して和訳したものを使用）し、調査に参加したすべての児童にとって初読となるよう配慮した。

児童らの反応は、「このようなお話は読んだことがないがとても楽しい」、「こういうお話をまた読みたい」という前向きなものが大半で、担任や読書担当の教諭らへのフォローアップインタビューにおいても、学校現場ではこうした「空所」のある作品がほとんど紹介されてこなかったことが確認されたと同時に、こうした作品を今後の読書活動において積極的に取り入れていきたいといった声が聞かれた。

## 3. 集団読みにおける児童らの発話の諸相について

本研究に先行して、2014 年に、ある小学校において児童らの読み聞かせを参与観察し、調査を行った際、教師による読み聞かせが行われる場において、児童らは、大きく分けて 3 種類の立場を意識して発話を行っていることがわかった。それは、Goffman の唱える「参与の枠組み」(participation framework) に照らして大別すると、① addresser (語り手) ② addressee (聞き手) ③ bystander (傍観者、呼びかけられない聞き手) と言えるものである。児童らは「静かに教師 (=語り手)」の話を聞くべき「授業」というフレームにおいて、同時に「物語世界」フレームにも入り込んで、物語の展開を告げる語りや絵に反応して声をあげるのであるが、その際、純粋に物語世界内部のできごとに対してあげる驚きの声や嘆息などがある一方で、あきらかに bystander を意識していると思われぬ、いわゆる「受け狙い」としての発言が高頻度で聞かれた。

## 研究成果の概要 つづき

これらの発話の直接の対象者は物語内部の登場人物やできごとであることが多いが、実際にはそうした、いわゆる「ツッコミ」に代表されるおもしろおかしい発話を bystander である他の児童らに間接的に聞かせることによって、発話者は対テキスト(物語世界)だけではなく、他の児童らとも相互行為を行っているのであり、こうした発話の瞬間、児童らは「物語世界」フレームから「授業」フレーム内に軸足を移して、仲間同士の茶化しあい、「おふざけ」といったコミュニケーションを行っていると言える。紙幅の関係上詳細は割愛するが、この調査・分析の結果、判明したのは、「相互行為のともなう集団的な読みにおいては、聞き手・読者は語り手との 1 対 1 の個人的な関係において個人的な解釈を生成するのではなく、その『場』を共有するすべての参与者間のコミュニケーションをとおして、ともに 1 つの生きた物語を創出している」ことである(村松, 2015)。

## 4. 本研究の成果

上記に述べた集団読みに特徴的な発話は、本研究においても、同じように生起していることが確認された。そして、今回の調査では、作品において中心命題となっている‘Something’、すなわち主人公の少年の家の庭に突如出現した「穴」の奥に潜んでいるであろう「何か」について、児童らがグループ読みの場で「なんだろう?」と話し合ったうえでそれぞれに思ったことをワークシートに絵と文章とで自由に記述したが、その内容は、児童同士の一連の会話の流れや内容と顕著に相関しているものが少なくなかった。そして、「穴」や「何か」について想像・創造する際の前提となる、作品のプロットに関する理解の正確さや気づきの深さもまた、グループ読みの際に交わされた児童同士の会話の様相と相関していた。

つまり、児童らが物語、殊に「空所」のある作品を読む際、その物語受容、意味生成は、テキスト対読み手の関係においてのみなされるのではなく、その読みの場というコミュニケーションの「今ここ」に参加する他者との相互行為によってもなされるのである。

このことを教育現場にあてはめてみると、児童らに「正解のある読み」だけを求めることや、そのようなテキストのみを与えて児童の「読解力」を評価しようとするのは、彼らの想像力・創造力の発揮できる場を奪っていることと同義であるとも言え換えられるであろう。児童らは単なる受け身の読者ではなく、作品及び仲間とのコミュニケーションを通じて物語世界を創造する共著者としての一面(co-authorship)を有しているのであり、そうした力は現代絵本のように「空所」のある作品と対峙した際に引き出されやすいと考えられる。

現在、日本の小学校では国語授業以外にも「朝読」と呼ばれる読書の時間が設けられているところが多数あるが、そこで児童らの創造的な読みが引き出されるような作品が意識的に用いられたり、児童らが自由に想像力・創造力を発揮させることのできるような話し合いの時間が与えられたりすることは稀である。そのような現代の日本の教育現場に、従来行われてこなかった新しい読みのあり方を提言しうる根拠が得られたことは、本研究の成果のひとつであると言えるであろう。

## 【参考文献】

Goffman, A. (1981). *Forms of talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

イーザー, W. (1982). 『行為としての読書: 美的作用の理論』岩波書店. [原著: Iser, W. (1978). *Act of reading: A theory of aesthetic response*. London: Johns Hopkins University Press].

村松麻里 (2015). 「子どもたちの声・つぶやきにみる物語の受容過程: 小学校3年生『読書』授業の談話分析を通して」『ことばと人間』第10号, 105-123頁.

Nikolajeva, M., & Scott, C. (2006). *How picturebooks work*. New York: Routledge.

Sipe, L. R. (2008). *Storytime: Young children's literary understanding in the classroom*. New York: Teachers College Press.

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④ 学会発表

学会名 : 第 18 回絵本学会大会

開催日 : 2015 年 5 月 30 日

開催場所 : 東京工芸大学

発表題目 : 現代絵本を集団で読む子どもたちの語りと解釈 : 談話分析の視点から

発表形式 : 口頭発表 (個人)

学会名 : The 22<sup>nd</sup> Biennial Congress of IRSCL (国際児童文学学会 第 22 回大会)

開催日 : 2015 年 8 月 11 日

開催場所 : University of Worcester (ウスター大学、英国)

発表題目 : Creating childhoods through contemporary picturebooks: Children's creative  
reading in class

発表形式 : 口頭発表 (共同)